和歌文学講座 10

秀歌鑑賞 I

10

和歌

秀歌鑑賞 I

和歌文学講座 10

和歌文学講座　第10巻　秀歌鑑賞　I

昭和四十四年八月二十日　初版印刷
昭和四十四年八月二十五日　初版発行

定価　一二〇〇円

編者　和歌文学会
会長　久松潜一

発行者　及川篤二

印刷所　暁印刷株式会社

東京都千代田区猿楽町二―二―六
桜楓社
TEL(二九一)五六六〇―二
振替東京　一八〇二〇

(第4回配本)

伊須気余理比売……九
弟橘比売……一一
倭建命……一三
黒日売……一四
川原史満……一六
斉明天皇……一八
磐姫皇后……二〇
舒明天皇……二三
有間皇子……二四
天智天皇……二七
額田王……二九
倭大后……三〇
中皇命……三二
持統天皇……三五
柿本人麻呂……三六
高市黒人……三九
大伯皇女……四一
大津皇子……四三
志貴皇子……四五
山上憶良……四七
大伴旅人……四九

山部赤人……五一
笠金村……五三
高橋虫麻呂……五五
大伴坂上郎女……五七
笠女郎……五九
狹野茅上娘子……六〇
湯原王……六三
市原王……六四
厚見王……六六
旋頭歌……六八
万葉集巻七……七〇
万葉集巻十一……七三
万葉集巻十二……七四
万葉集巻十三……七六
万葉集巻十六……七八
東歌……八〇
防人歌……八三
大伴家持……八四
在原業平……八六
小野小町……八八
僧正遍昭……九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

素性法師……九一
凡河内躬恒……九三
紀貫之……九五
紀友則……九七
壬生忠岑……九八
伊勢……一〇〇
古今集における読人しらず……一〇二
源順……一〇五
大中臣能宣……一〇六
清原元輔……一〇八
中務……一一〇
源信明……一一一
恵慶法師……一一三
平兼盛……一一六
藤原兼輔……一一七
藤原実方……一一八
小大君……一二〇
斎宮女御……一二三
藤原長能……一二五
伊勢大輔……一二七
曽禰好忠……一二九

藤原公任……一三二
能因法師……一三三
道綱母……一三六
赤染衛門……一三八
和泉式部……一四〇
紫式部……一四三
相模……一四五
大江匡房……一四七
行尊……一四八
選子内親王……一五〇
藤原範永……一五二
藤原経衡……一五四
四条宮下野……一五六
成尋阿闍梨母……一五八
周防内侍……一六〇
源経信……一六三
原俊頼……一六四
藤原顕輔……一六五
藤原清輔……一六七
西行……一六九
俊恵法師……一七二

後鳥羽院……一七三
藤原俊成……一七四
寂蓮……一七六
慈円……一七八
鴨長明……一七九
藤原良経……一八一
源頼政……一八三
藤原定家……一八五
藤原家隆……一八六
藤原秀能……一八八
源実朝……一八九
宗尊親王……一九一
後藤基政……一九三
式子内親王……一九四
建礼門院……一九六
宮内卿……一九八
俊成卿女……一九九
永福門院……二〇〇
藤原為家……二〇三
藤原為相……二〇四
伏見院……二〇六

花園院……二〇八
光厳院……二一〇
藤原為兼……二一二
宗良親王……二一四
今川了俊……二一六
正徹……二一八
心敬……二一九
三条西実隆……二二一
細川幽斎……二二三
木下長嘯子……二二五
田安宗武……二二七
加茂真淵……二二九
楫取魚彦……二三一
小沢蘆庵……二三三
加藤千蔭……二三五
上田秋成……二三六
村田春海……二三八
木下幸文……二四〇
良寛……二四一
香川景樹……二四四
加納諸平……二四五

和田敬足……二四六
佐久良東雄……二四八
熊谷直好……二五〇
中島広足……二五一
伴林光平……二五三
久貝正典……二五四
野村望東尼……二五六
平賀元義……二五九
古典秀歌抄……二六一
鑑賞歌索引……二六三

秀歌鑑賞 I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

＊伊須気余理比売

狭井河よ　雲立ち渡り　畝火山　木の葉さや
ぎぬ　風吹かむとす　（『古事記』二〇）
畝火山　昼は雲とゐ　夕されば　風吹かむと
そ木の葉さやげる　（『古事記』二一）

予備知識をもたずに鑑賞するならば、この二首は畝火山近辺の自然をうたった純粋な叙景歌として理解される。すなわち、一首目は狭井河の方から雲が一面に立ちわたり、畝火山の木の葉がざわめき、今にも大風が吹き出しそうな気配を、二首目は畝火山の昼と夕との情景の変化によって天候が急速に変わりつつあることをうたっているのである。もっとも、天候の変化を予知し表現している歌といってもよいであろうが、その視覚的経験的あるいは霊感的な判断が畝火山をめぐる自然の現象に基づくものである点からいって、自然観照の歌、叙景の歌といってよいであろう。ところが、記紀の歌謡を素材の上からみると、人事的素材によるものが圧倒的に多く、神祇や自然に関するものは稀にしか見あたらないというのが実情である。殊に自然を素材にした歌にいたっては、この二首の連作以外に無く、しかもこの歌とても自然の美的景観をうたっているわけではないが、ともかく客観的な自然を一首の素材にしているだけでも、稀有の存在であるといってよい。記紀歌謡の自然は、人間化または神霊化された自然として表現されているのが普通であって、それが特徴でもある。

しかし、この二首を叙景歌とする考えは、『古事記』の記録から独立させての解釈であって、『古事記』の中に嵌めこまれた二首は、もはや叙景歌ではない。記紀の解釈にあたっては、記録そのままと記録の物語からの解放という、二つの態度が基本として存在する。『古事記』の伝承によると、神武天皇崩後、その異母兄タギシミミの命が皇后の伊須気余理比売と結婚された時、三人の皇子たちを殺そうと謀ったので、母の比売がその危急を知

らしめようとして、この二首をうたい、御子たちは命の殺意を知り、逆に攻め殺したとある。これによるならば、木の葉のざわめきによって大風が吹こうとしている天候の急変をうたっているのは、実は身辺の動静から大事件の到来を予見し、それを告げようとした寓意の歌であったということになる。古代の人々には、神の声として事件の前兆が歌に現われるという考えがあったらしい。二首の歌をこの物語に挿入するようになったのも、「木の葉」がざわめき「風吹かむとす」る不気味な情景と、事件の前兆とを附会し、寓意のある歌として解釈したからであろう。

伊須気余理比売には、もう一首の歌がある。それは神武天皇と結婚する前のことである。比売が乙女たちと大和の高佐士野に遊んでいた時、比売を皇后に推薦しようと考えていたオオクメの命も天皇と一緒にその野に遊んだ。七人の乙女たちの先頭にいた比売が天皇のお目にとまったので、天皇の仰せを伝えようとしてオオクメの命が比売に近づいた時、命が目に入墨を施していたので不思議に思って、

あめつつ　ちどり　ましとと　など黥ける利目

（『古事記』一七）

「鳥のように、どうして大きな目をしているのですか」と問うたとある。オオクメの命は「嬢子に　直に逢はむと　わが黥ける利目」（記一八）と答えた。あなたに直接お会いしたくて……という命の機智的な答えも手伝って比売の承諾を得たので、天皇は狭井河のほとりにある比売の家で、一夜を共にされた。これより後、比売が宮中に参上した時、天皇は当時を想い起されて、

葦原の　しけしき小屋に　菅畳　いやさや敷きて
我が二人寝し

（『古事記』一九）

とうたわれた。このようなロマンの香り高い歌と物語の直ぐ後に、タギシミミの命の叛乱が語られ、「狭井河よ」「畝火山」の二首が登場するのである。この二首を伊須気余理比売に関する一連の物語歌として解釈するならば、叙景性や寓意性を論ずる前に、まず母親としての比売の

憂いと不安を汲みとるべきであるかもしれない。

（戸谷高明）

*弟橘比売

佐泥佐斯佐賀牟能袁怒邇毛由流肥能本那迦邇
多知弖斗比斯岐美波母　（『古事記』）

『古事記』（中）は、この歌を倭建命の妃弟橘比売の作として伝える。倭建が東征して相模に入ると国造が欺いて命の一行を野に誘い、火を放って焼殺そうとする。命は刀で草を刈り、姨倭比売に賜った燧で向火をつけ、逆に国造らを滅した。そのところを焼遣というともある。命の一行は、さらに進んで上総に渡るべく走水の海（浦賀水道）に乗入るが、海神風浪を起して舟は進まない。比売は「妾、御子に易りて海の中に入らむ。御子は遣はさえし政を遂げて覆奏したまふべし」と命にいい、菅畳・皮畳・絁畳を波の上に敷き重ねて降り立つ。と、浪はおさまり舟は進んで対岸に着くことができた。「さねさし」の歌はこの時この際の比売の絶唱であった、と『古事記』はいうのである。七日の後比売の櫛が海辺に流れついたので、陵をつくっておさめたとあるのもあわれは深い。『書紀』にもこの話はあるが、二三の異同もあり、何よりこの肝腎の歌がない。紀は焼津を駿河としたために、この歌を省く結果となったのかも知れない。記伝は相模駿河分国以前のことと解し、稜威言別は紀を正しとする。さもあらばあれ、神と人とが雑居する遠い昔の物語である。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも
武蔵野は今日はな焼きそ若草の妻も籠れり我も籠れり　（『伊勢物語』）

並べてみると、女と男の歌い交した問答歌の趣があるのは、二首ともに火田農法に関わるからである。前の歌を、あちこちに焼畑の火の燃える春の野に「家告らへ名宣さね」と言問われた娘の歌とみてよいのではないか。或はもと東国の民謡として、口々に愛誦されたものかも知れ

ない。これを比売のこの場の作とみるなら、

相模野の燃える火の中に立って、比売は無事かと安否を問うてくださったあなたよ。

と解し、その君のために今度は私が犠牲になります。ということで一往物語の筋は通る。

しかし相模の焼津は記伝の弁にも関わらず苦しいし、「入海時歌としては、ふつに適ず」という稜威言別の見方も否定しきれまい。格調の高いすぐれた歌謡ではあるが、比売のこの場の作とみることはむつかしく、伝説のヒロインが詠んだとされる歌というに止まる。

付言したいのは枕詞「さねさし」である。記伝は「佐斯(筆者)は国の名にて、佐泥は真と云と同く美たる言」と解し、稜威言別は「真嶺立」で富士の聳え立つ意と主張した。福井久蔵博士の「枕詞の研究と釈義」には、先学の説を列挙すると共に、自考としては喜田貞吉博士のさしをアイヌ語のチャシ（山城）の転とする説に賛意を表してある。新しくは吉田澄夫博士に『「さねさし」考』（「文学論藻」第三十二号）があり、武蔵のサシは火田耕法を意味するとの柳田国男説に基き、さは接頭語、ねは樹木の根、さしは野を焼いたあとの抜根作業に、二本の棒を中央でしばり、その棒の股に根をさし込んで掘り起すわざをいうと説いてある。『日本古典文学大系』本の古事記頭註は「語義未詳。相模の枕詞であろう」とするのみ。なお、後考をまつべきであろう。

（市村　宏）

*倭　建　命

大和は　国の真秀ろば　畳なづく　青垣　山籠れる　大和しうるはし　（『古事記』三〇）

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の　熊白檮が葉を　髻華に挿せ　その子（『古事記』三一）

はしけやし　吾家の方よ　雲居立ち来も

（『古事記』三二）

『古事記』ではこの三首を倭建の命が東征の帰途、伊勢の能煩野に到りついた時、国を偲んでうたわれた歌で

あると伝え、二首目の後に「この歌は思国歌なり」、三首目の後に「こは片歌なり」と注している。すでに病重く、死を間近に予感していた命が、故郷の大和をお思いになってうたわれた歌で、青々とつづく山なみに抱かれるようにつつまれている大和の美しさを讃え、健康な者はあの平群の山の立派な樫の葉を髪に挿して、生の歓びを満喫せよ、健康な者どもよ、と部下に呼びかけ、さらに吾が家の方から起ちのぼってくる雲を望みながら、懐しい大和に思いをはせているのである。ここには華やかな武勇や恋とは対蹠的な悲哀感が漲っている。

しかし、以上は『古事記』の倭建の命物語に基づいての解釈である。三首を物語から解放するならば、大和の国讃めの歌であり、初夏の行楽を思慕した歌であり、旅での感興をうたった歌であって、もともとは湿っぽい歌ではなかったであろうが、これらの歌に流れている思国的なものが命物語と関連をもつようになったのであろう。『日本書紀』ではこの三首を景行天皇が日向国子湯の県に行幸された時、京都を憶びてうたわれた歌であるとしている。歌の順序や歌詞にも異動があり、三首の後に「こは思邦歌と謂ふ」とある。この三首は、もともと命や天皇の事蹟と無関係な独立歌謡として楽府などで保存され、うたわれていたものであろう。

『古事記』は倭建の命の生涯を語ることに熱心であるが、『日本書紀』の日本武尊は物語的な統一もなく、天皇への忠誠のみが強調され、人間的なものへの関心が閑却されている。古事記は命の戦闘・知略・ロマン・悲哀などを物語るにあたって、出雲建を謀って打ち殺した時の歌（書紀では命伝承と関係なく、「時人の歌」になっている）、走水の海で弟橘比売の命が惻々たる愛情を流露した「さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の　火中に立ちて　問ひし君はも」の歌、酒折の宮での火焼の翁との問答歌、ミヤズ比売との問答歌（命の歌、後出）、尾津の崎の一つ松に向って親愛の情を寄せている歌、三首の思国歌に続く辞世の歌（後出）、后たちの哀しみを漂わす葬儀の歌三首など、一五首（命の歌は八首）の歌謡を包摂することによって、いっそう文学的効果を高めているのであるが、

これに対して『書紀』の方は僅かに三首の歌謡しか用いていない。

ひさかたの　天の香具山　とかまに　さ渡る
鵠　繊細　撓や腕を　枕かむとは　吾はすれ
ど　さ寝むとは　吾は思へど　汝が着せる
襲の裾に　月立ちにけり　（『古事記』二七）

命は東征の帰路、さきに約束されたミヤズ比売の許にお寄りになり、この歌をうたわれた。香具山を鋭い鎌のように渡っていく鵠（第四句まで）は、比売のかぼそい、しなやかな腕を（第五六句）引き起す序詞になっている。その腕を枕にし寝ようと思うけれども、あなたの襲に月が立って（月経の譬喩）しまったことだ、という露骨な内容をいっているのであるが、序詞の点景といい、「月立つ」の譬喩といい、美しい感覚的な歌である。あなたを待ちかねて……という比売の歌もいじらしい。しかし、再会の歓びも長くはなかった。命は比売のもとに草薙の剣を置いて、イブキ山の神を撃つのであるが、これが命の運命を悲劇にした。イブキ山の神に悩まされた命は、能煩野にいたって思国歌をうたい、さらに病が重くなった時、

嬢子の　床の辺に　我が置きし　つるぎの太
刀　その太刀はや　（『古事記』三三）

とうたい終って、お隠れになった。この歌には、英雄倭建の命の辞世の歌にふさわしいロマンと勇者の世界がある。

（戸谷高明）

*黒　日　売

大和へに　西風吹き上げて　雲離れ　退き居
りとも　我忘れめや　（『古事記』五五）
大和へに　行くは誰が夫　隠水の　下よ延へ
つつ　行くは誰が夫　（『古事記』五七）

この二首は『古事記』の下巻・仁徳天皇の条にある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com